第24回

徳島透析療法研究会

プログラム・抄録集

会　長：渡辺恒明
会　期：平成５年７月４日(日)
会　場：大塚ヴェガホール

プログラム

教育講演

「血液透析 VS CAPD」 …… 65

小松島赤十字病院　渡 辺 恒 明

一般講演

1　MRSA検出患者の看護上の問題点と対策 …… 65

小松島赤十字病院　久 米 宏 実　他

2　CAPDにおける訪問看護の患者基準と訪問時の観察チェックポイントの作成 …… 66

ＪＡ徳島厚生連　阿波病院　菅 尾 真 弓　他

3　腎移植を控えて指導困難なCAPDの一症例 …… 66

医療法人　川島会　川島病院　藤 井 優 子　他

4　血液ろ過によるアミロイド骨関節痛の治療効果 …… 67

川島病院　増 尾 浩 司　他

5　当院におけるKT／Vによる至適透析の検討 …… 67

阿南共栄病院　透析室　中 野 善 文　他

6　長期開存内シャント15例における血管造影での検討 …… 68

川島病院　吉 武　理　他

7　CAPDに血液透析を併用している症例の検討 …… 68

小松島赤十字病院　高 橋 裕 児

8　EPO無効症例の検討 …… 69

小松島赤十字病院　須 見 高 尚　他

9　慢性血液透析の腹水貯留の一例 …… 69

矢野医院　矢 野 弘 幸

10　播種状皮膚真菌症を来した血液透析例 …… 70

阿南共栄病院　三 宮 建 治　他

11　血液透析患者におけるcarboplatinおよびetoposideの体内動態に関する検討
（肺腺癌の一例） …… 70

徳島県立中央病院　楊 河 宏 章　他

特別講演

「糖尿病性透析患者の管理」

川崎医科大学腎臓内科　平 野　宏　助教授

教育講演

「血液透析 VS CAPD」

小松島赤十字病院
渡辺恒明

平成5年5月現在の徳島県の透析患者数は1,145人で昭和46年以来増加傾向は衰えていない。人口（82.7万人）百万対比は1,385となり、CAPDは114(9.7%)である。本院でのCAPDの最近の導入率は30%を越えている。CAPD療法が導入された昭和57年からの新規導入患者のうち高齢者、糖尿病性、重症心疾患、HDからの変更を除いた症例を比較すると導入直前の条件は略同じであり、その後の生存率にも有意差が無い。CAPDで血清蛋白、アルブミンがやや低く、β ミクログロブリンとPTHは低く、ALPとコレステロールは高いが、その他はほとんど差がない。

人工透析膜と腹膜の性質の差異、各透析の原理と方法、透析液の性状とアルカリ化剤の比較、効率に関係する因子、KT／VとPETについて、設備やアクセスと手術および医療費の比較、糖尿病性腎不全に対する両者の比較、患者の生活性とスタッフの拘束時間、問題点などについて解説した。

1．MRSA検出患者の看護上の問題点と対策

小松島赤十字病院
○久米宏実、新居里枝、加地　環
尾嶋美恵、内藤由美、遠藤智江
坂東久子、真貝静江、渡辺恒明

透析患者85名中血液透析の2名の鼻腔にMRSAを検出し、糖尿病と癌を合併していた。透析室では、出入口の床のみから検出されたが、防塵用粘着シートを追加してからは検出されなくなった。普通の透析はワンフロアーであるために、スタッフや患者により感染菌を他に移動させる可能性があること、出入口が1箇所であるため感染患者も同じように出入りすること、感染患者の隔離透析に専任スタッフが必要であること、隔離透析であるため患者や家族の不安が大きいことなどの問題点があった。対策として、患者や家族への充分な説明と、含嗽・手洗いの励行と、バランスのとれた食事摂取の指導をした。手拭きはペーパータオルに、ベットメイキングは掃除機に、清掃はテゴー液に変更し感染は広がらなかった。隔離透析は、自動血圧計を使用し、専任スタッフを決め出来るだけベットサイドへ行くようにした。保菌者はイソジンゲル塗布を行っているが、隔離透析はしていない。

2．CAPDにおける訪問看護の患者基準と訪問時の観察チェックポイントの作成

ＪＡ徳島厚生連　阿波病院
○菅尾真弓、武田潤子、井内豊子
正木朋子

腎不全の治療法として、近年、連続携行式腹膜透析(CAPD)が増加傾向にある。この治療法は、患者や家族が在宅で行うものである。安心して在宅CAPDをするためには、看護婦が、家庭での生活環境や操作手順を観察し、基本操作からのずれを直したり、相談相手になったりして、温かく見守る訪問看護が必要と考えられる。

当院では、CAPD開始当初から１名の看護婦が訪問看護を行ってきたが、患者数の増加や患者の高齢化、合併症の併発などにより、将来は、複数の看護婦の訪問が必要になるものと思われる。そこで、CAPD訪問看護の対象となる患者基準と訪問時誰もが一定レベルの観察が行えるようにチェックポイントを作成したので、訪問事例を通して紹介す。

3．腎移植を控え指導困難なCAPDの一症例

医療法人　川島病院
○藤井優子、福島広江、木村貞子
河井洋子、高橋淳子

今回、腹膜炎の発生率が最も低いといわれている、バクスターUVフラッシュシステムに変更後も腹膜炎を繰り返す、アメリカでの腎移植を控えているにもかかわらず、服薬が確実にできない、飲水量が多い、CAPDノートの記入ができない等、自己管理での問題が多い患者に対し、訪問看護を行い、再指導を試みましたが、再訪問の拒否、来院しないなど、計画が実行できませんでした。

そこで、このような事例を経験し、多くを反省するとともに、ここに問題提起し、今後私たちの看護に生かしていきたいと思います。

4．血液ろ過によるアミロイド骨関節痛の治療効果

川島病院
○増尾浩司、川島　周、水口　潤
播　一夫、水口正幸

長期血液透析患者にみられる、骨関節症・貧血・掻痒症などの合併症に対して、ハイパフォーマンス・メンブレンが使用されている。そのような血液透析だけでは、臨床症状の改善に乏しい症例に対して、血液濾過を併用することで、その臨床評価を行った。

骨関節痛を訴える長期血液透析患者のうち、副甲状腺機能亢進症、整形外科的疾患の合併や関節の異所性石灰化を認めず透析アミロイドーシスによる骨関節痛の可能性が高いと思われた5症例を対象とし、血液濾過を週1回併用した。ヘモフィルターとしてFH-88HまたはPF-80を使用した。

5症例のうち、2症例で消失、3症例で改善がみられたが、血清総蛋白・アルブミン・BMGおよび、BUN・Cr値には、有意な変化はみられなかった。血液濾過の併用は、従来のハイパフォーマンス・メンブレンでは、消失しない関節痛に対して有効であると考えられる。疼痛発現物質は、現在のところ不明であり検討中である。

5．当院におけるKT／Vによる至適透析の検討

阿南共栄病院　透析室
○中野善文、武田　勉、佐野貴史
三宮建治、喜多良孝、佐木川　光

要旨

透析患者64名により、KT／Vによる透析量の検討をおこなった。

TAC60mg／dl以下、pcr0.9-1.3g／kg／day、KT／V0.9-1.3を至適条件と仮定するとTACで20%、pcrで38%、KT／Vで15%が満たされておらず、NCDSによる合併症をともなう確率の高いゾーンには、2名の週2回透析患者がみられた。TACはpcrの関与が支配的で、pcr1.3g／kg／dayの条件下ではKT／Vは1.0以上にする事が必要であると考えられる。

定期透析によるシュミレーションによると至適条件下(KT／V＝1.0)においてはpreBUNは85mg／dl程度でTAC60mg／dl以内に維持可能であると考える。

実測値とシュミレーション値の平均値はほぼ同じで患者個々でちがいはあったがノモグラムにより透析量の推定と計画は充分可能であると思われる。

6．長期開存内シャント27例における血管造影での検討

川島病院
○吉武　理、田中幸子、水口　隆
曾根佳世子、河内　譲、水口　潤
川島　周

〔目的〕長期にわたり開存している内シャントの血管変化、血液量について検討した。
〔方法〕内シャント手術後10年以上の開存期間を有する27症例を対象とした。血管造影は動脈側穿刺部より吻合部に向けて造影剤を注入し行った。また血流量の測定は、ドプラーエコー法にて行った。
〔結果〕造影上の血管の形態的変化としては静脈の動脈瘤様変化、狭窄などが多くみられた。血流はいずれも良好であった。

長期開存例では血管変化が予想外に多く、血管造影を行っておくことがトラブル発生時の血管再建の際に有用であると考えられた。

7．CAPDに血液透析を併用している症例の検討

小松島赤十字病院
○高橋裕児、渡辺恒明、榊　芳和
阪田章聖、木村　秀、須見高尚
片山和久

CAPD施行中透析不充分となりHDを併用した3症例について検討した。症例はCAPD導入後約1年～1年6ケ月後に貧血、BUN・Crの高値、血圧のコントロール不良、全身倦怠感が出現したので、Kt／V、ENを用いて至適透析性を評価した。Kt／Vは1.33～1.59、ENは3.05～4.45と至適透析基準を満たさなかった。PETでは症例1及び3はLow Averageに、症例2はHighに属していた。透析不充分に対し、1日5回の交換、及び2.5%迄の高濃度液も用いて1日10ℓ迄の透析液を使用したが充分ではなかった。そこで週1回のHDを併用した。結果、臨床症状はNursing Assessment Scoreとして評価したところ全てに改善を認めたが、症例2、3では十分ではなかった。症例2では体重のコントロールが満足ではなくHt値の改善も十分とはいえなかった。3症例とも体重が60kg以上の男性であり、症例2についてはサイクラーの使用が必要かもしれない。

8．EPO無効症例の検討

小松島赤十字病院
○須見高尚、渡辺恒明、榊　芳和
阪田章聖、木村　秀、片山和久
高橋裕児

エリスロポエチン（EPO）低反応例・副作用例につき検討した。EPOは90人中64人、約70%に投与されている。投与量はHDではおよそ3000～6000IU/Wで維持できている。CAPDでは3000～6000IU/2WでHDの約半分である。低反応例はHD11例、26.8%・CAPD 8例34.8%に見られた。HDでは鉄欠乏が主な原因であったが鉄剤投与により改善された。CAPDでは透析不足と思われるものが半数の4例に見られた。原因を特定できない不明例もHD・CAPD併せて5例あり、副作用は血圧上昇・頭痛が5例（7.8%）あったのみで他は認められなかった。これらに対しては降圧剤・投与量の変更等により対処し、3例は充分なHt値を維持し2例は再び投与を再開している。

9．慢性血液透析の腹水貯留の一例

矢野医院
○矢野弘幸
香川内科
香川博幸

慢性血液透析患者に腹水貯留をきたし、人血清アルブミン製剤の静注と濃縮濾過腹水の静注とを併用し、有効であった症例を経験したので報告した。

患者は、52才の男性で、既応歴は、30年前胃切除術、20年前痔瘻手術を受けていた。透析歴は約1年で、導入後6ケ月間は、体力が回復し、順調に経過していたが、7ケ月目頃より、手術不可能なひどい痔瘻、慢性的な下痢、食欲不振、飲酒、低栄養状態が続き、腹水貯留をきたすようになった。透析、ECUMなどによる除水強化に抵抗を示したため、人血清アルブミン製剤の静注と濃縮濾過腹水の静注とを併用した。約1ケ月間で、何ら副作用もなく、有効であった。

10. 播種状皮膚真菌症を来した血液透析症例

阿南共栄病院
○三宮建治、櫛田俊明、安藤道夫
喜多良孝、宮内隆行、菊辻　徹
佐木川　光

血液透析患者が発熱及全身痛を訴え来院。薬剤性のミオパチー、肺炎を疑い、血液透析　抗生剤及抗結核剤投与を行ったが、症状は改善されず。一方、第2病日から全身の発疹が出現し、第9病日に皮膚生検を施行したところ、真菌症と判明し、スポロトリコーシスが疑われた。しかし、すでに全身状態が悪化しており、救命し得なかった。剖検を得ることができず。死因等につき断定はできなかった。透析患者の不明熱の場合、詳しい真菌検査も併せて行うべきと思われる。

11. 血液透析患者におけるcarboplatinおよびetoposideの体内動態に関する検討（肺腺癌の一例）

徳島県立中央病院
○楊河宏章、滝下佳寛、坂東弘康
篠原　勉、田中晴子、炭谷晴雄

症例は60才の男性。53才より、糖尿病性腎症による慢性腎不全にて近医で週3回の維持透析を受けていたが、胸部異影の精査目的に当院呼吸器科に紹介された。諸検査にて、骨転移を伴うStageIVの肺腺癌と診断し、同意を得たのち化学療法を施行した。

carboplatin 300mg／m²（第1日）、etoposide 50mg／m²（第1、3日）を透析1時間前より30分かけて点滴静注、投与終了30分後から4時間かけて透析を行い、経時的に抗癌剤の血中濃度を測定した。carboplatin血中濃度は透析にて速やかに低下、一方etoposide血中濃度の低下は緩やかであったが、いずれも投与翌日には低レベルとなった。

臨床的には副作用として貧血を認めたが、白血球減少、血小板減少は軽度であった。消化器症状などの自覚的副作用はほとんど認められなかった。2コース後の効果判断にてPDであったため、現在近医にて血液透析を継続しながら当院外来にても経過観察中である。